

## 小泊校下の出稼ぎ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 小百合 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/23781">http://hdl.handle.net/2297/23781</a>

## 5. 小泊校下の出稼ぎ

林 小 百 合

1. はじめに
2. 出稼ぎの定義と背景
3. 珠洲市における出稼ぎの概要
4. 小泊校下の出稼ぎの実態
5. 考察
6. おわりに

### 1. はじめに

私は珠洲市出身である。私の祖父は75才まで出稼ぎで酒造りへ行っていたので、出稼ぎという仕事のスタイルはもともと身近に感じるものだった。しかし、なぜ出稼ぎを行っていたか、どういう気持ちで働いていたかなどは全く考えたことがなかったし、出稼ぎについて祖父の話をあまり聞いたことがなかった。幼い頃は祖父が70歳を越えても遠い地方へ働きに行くことを不思議に思っていたし、行かないでほしいとも思っていた。

今回いろいろな方にお話を伺っていく中で、出稼ぎに対するイメージが一変した。出稼ぎとは必要に駆られて行うものだと考えていたが、どうもそれだけではないのではないかと思い始め、詳しく調べてみたいと思った。

本章では、まず一般的な出稼ぎについて触れた後、珠洲市における出稼ぎ、さらに小泊校下で暮らしている人々が実際に行っている、または行ってきた出稼ぎがどのようなものだったか詳しくみていきたい。

### 2. 出稼ぎの定義と背景

「出稼ぎ」という言葉は人によっても、一般的にも様々な概念に使われ、定義もまた様々である。例えば、日ごろは農業に従事しているものが、農閑期を利用して他地方の工場などに働きにでる

ことは出稼ぎと呼ばれるし、あるいは、農村地帯の娘さんが結婚前に他地方の繊維工場に2、3年働きに行き、結婚費用を貯めるのも、その村では「あの娘は出稼ぎに行った」という。また、ほとんど1年中他地方で働き、田植えや稲刈りの時期、あるいは盆や正月に短期間帰るだけで、農業は両親または妻にまかせきりという生活をしている人も、「とうちゃんは出稼ぎに行っている」と表現される。しかしサラリーマンで、転勤などで家族は残して単身赴任している人は、本質的にみれば出稼ぎ者と呼ばれる人と変わらないように思えるが、それは出稼ぎとは呼ばれない。このようなことから、出稼ぎを定義するのは難しい。

『珠洲市史 第六巻』（1988：826）においては、出稼ぎとは地元を離れ、一定期間地域外で就労し、再び地元に戻る労働力の地域間における回帰的移動であり、地元外で就労期間中に得た労賃は、滞留期間中の生活費を差し引いた余剰を、地元での家計補助や、再生産に必要な経費に充当する目的を持って行われる移動であると定義されている。

また、金崎（1967：27-30）によると、出稼ぎを行う背景として次の点が考えられる。

第一は、気候等の自然条件により、その地域の農業あるいは漁業に必然的に農閑期が生じることである。それを利用して出稼ぎを行う。これは農業あるいは漁業によってある程度生計が立てられることが前提である。そのような前提がある限り、人々は母村に定住し、季節的に生じる過剰労働力を利用して出稼ぎを行う。

第二は、母村における生活の基盤をなす農業あるいは漁業による収入に対して、絶対的に過剰な労働力（人口）存在するために母村以外の地域において生活手段の一部を求める場合である。この場合は前者と異なって、自家の農繁期や漁業の時期であるにもかかわらずよりよい収入を求めて母村を離れる人も多かった。季節出稼ぎとは若干異なるが、極端な場合には「口減らし」的な意味でも行われた出稼ぎである。

第三の背景は、母村を離れて他地方へ出稼ぎを行う場合と異なって、通勤して収入を得るものである。本来なら出稼ぎとは呼ばない現象であるが、本質は同じで、ただ通勤か他地方へ出て行くかの相違だけであるのでここに含める。

第四の背景としては、生計を補うか生計を立てる必要がないにも関わらず、あえて出稼ぎを行うものである。形態的にみれば第一あるいは第二のケースと全く同じであるが、質的に全く異なったものである。例えば能登の主婦が加賀平野に1週間から10日あまり稲刈りの出稼ぎを行ったのがそれである。収入の面からみれば1ヶ月の生活費にも足りないものであり、わかりやすくいえばアルバイト的なもので、観光旅行などを兼ねていたことが多かった。

第一、第二の背景は戦前、第三、第四は戦後顕著となる。

### 3. 珠洲市における出稼ぎの概要

『珠洲市史』(1980:827)によると、昭和45(1970)年当時、北陸地方(新潟・富山・石川・福井)の出稼ぎのうち、石川県は21パーセントを占めていた。

石川県の出稼ぎ者は、珠洲市や輪島市周辺のいわゆる奥能登地域に集中しており、石川県全体の60~70パーセントを占めていた。それが中能登、口能登に至るにしたがって少なくなり、加賀地域ではまったく見られなくなる。奥能登地域は交通の不便な地帯で、かつ地場就職の機会が少ないこと、加えて農業基盤が弱く、沢棚田が相対的に多く零細な農家が大部分を占めているといった点などから各種出稼ぎの盛んな地域であり、能登半島の珠洲市や内浦町を発祥地とする日本酒を作る代表的な杜氏集団である能登杜氏を供給する源であった。

戦前は、出稼ぎはこの地域の自然の欲求で、出稼ぎにいたる動機は隣地刺激、隣人刺激に基づくものが多く、したがって同郷人同職集団的な傾向があった。特に冬季出稼ぎが多くを占めた。かつて盛んだった塩田の廃止による刺激もあった。

出稼ぎ先は大都市圏への集中度が高く昭和42~46(1967~1971)年平均で77パーセントであった。またそのうち43パーセントが京阪神、24パーセントが中京地帯の労働市場と結合していた。

昭和45(1970)年、珠洲市は出稼ぎ農家率が30パーセント以上で、昭和40~45(1965~1970)年にかけて出稼ぎ者が約30パーセント増加した。出稼ぎの背景と考えられる自然的立地条件としては、地形的な制約から耕地が少ないこと、12月中旬から3月中旬までの降雪期間における交通及び農業生産の困難さが挙げられる。社会経済的条件としては人口の減少、産業別就業人口にみられる第一次産業への偏在、地元での工業成長が見られない、零細経営が多い、交通体系の不備などが挙げられる。農村構造としては兼業率が大きいこと、他の市町村に比べて第一種兼業農家の比重が大きいこと、恒常的勤務・人夫日雇い・自営兼業の比率が低いこと、一戸あたり耕地面積が少ない割には農業を主とする基幹的従業者数が多いこと、農家所得と家計費との差が大きいことが挙げられる。さらに出稼ぎ農家の実態として出稼ぎ者の経営規模は、1ヘクタール以下の零細農家が91%を占め、出稼ぎ者の世帯上の地位では世帯主・後継者・世帯主の妻の三者が主体となっている。出稼ぎ日数では120~180日のものが多く、出向地は京阪神が圧倒的多数を占めていた。出稼ぎ先の職種では製造業が多く、歴史的背景を持つ杜氏が現在も引き継がれている。出稼ぎの動機としては、①生活水準の向上を狙って、②観光を兼ねて、③核家族の分離を望んでの三つが大部分であったということである。

昭和50(1975)年度における出稼ぎ者は2,441人(短期出稼ぎ者も含めると約3,000人)であった。これは農林漁業に従事する人の90%程度に相当する。地区別に見ると(表1参照)、宝立・三崎・西海地区(日置・大谷)がいずれも市全体の20パーセント以上を占め、この3地区で68パ

一セントもの出稼ぎ者を出している。戦前から半島東端部や外浦地域は出稼ぎ度が多く、飯田周辺などの平坦部は出稼ぎが少ない。また内浦においては海岸集落よりも海岸から少し離れた集落に出稼ぎが多く、さらに内陸部に入るとまた出稼ぎは少なくなることから、一般に海岸地帯は多出稼ぎ地帯であり、内陸部は寡出稼ぎ地帯であるとしている。

表1 昭和50(1975)年度地区別出稼ぎ登録者数

地区名	人数(人)	地区別割合(%)
宝立	526	21.5
上戸	159	6.5
飯田	24	1.0
若山	306	12.5
直	42	1.7
正院	202	8.3
蛸島	51	2.1
三崎	616	25.3
西海	515	21.1
合計	2441	100.0

(『珠洲市史 第六巻』832ページより)

この頃の賃金の月額は平均的にみて男子15~16万円、女子で10万円であることから、10月から4月まで6カ月働いたとして、男子では90万円、女子で60万円の出稼ぎ所得があるということになる。それに失業保険として50日分の賃金が支給されるので、男子では25万円、女子では15万円が加算され、失業保険給付も出稼ぎ所得として算入すると、男子では105万円、女子では75万円の収入となる。出稼ぎ所得は市全体で20億円以上になり、農産物収穫高約40億円(経営費を差し引くと24億円程度の農業収入)と比較すると珠洲市における出稼ぎが重要であることがわかる。

#### 4. 小泊校下の出稼ぎの実態

小泊校下の主な出稼ぎ先は、酒屋や縫製・繊維関係の工場などで、期間は主に10月~4月の農閑期、漁閑期である。雲津では瓦産業が盛んだったが、瓦工場は11月から4月は閉まるのでその期間を利用して出稼ぎを行っていた。

6ヶ月勤めてやめると失業保険がもらえるので、1年1年短期の失業保険をもらって出稼ぎに行っていたという話をあちこちで聞いた。失業保険をもらって出稼ぎへ行き、出稼ぎ先で半年間働

いて、また失業保険をもらって3、4月ごろ帰ってきて農業や漁業、瓦作りをしながら暮らす。失業保険が出るようにするために、出稼ぎ組合も作られた。

葉タバコ栽培をしていたHさん（80歳代、男性、高波）の話では、葉タバコ栽培は2月から始まるが、Hさんが帰ってくるまでの1、2ヶ月の間は奥さんや父親が作業をするなどして乗り切っていたらしい。

行き先は商業紹介場（今で言うハローワーク）での紹介、知り合いからの紹介などで決めた。毎年同じところへ行く人もいれば、酒屋へ出稼ぎに行っていたYさん（70歳代、男性、小泊）は「毎年同じ酒屋へ行くわけではなく、他の酒屋へ行った人と情報交換をして決めることもしていた」と言っていた。

珠洲市の出稼ぎ組合が市役所にあり、出稼ぎに行っている人に珠洲市の情報をのせた冊子を送っていた。

雲津では瓦産業が盛んだったが、瓦工場は4月～11月の間閉まり、冬は京都の伏見や神戸の灘などへ出稼ぎに行く人がいた。

小泊は半農半漁で収入は漁業が主である家が多かった。一般的に出稼ぎが行われていて、現在でも5～6人出稼ぎに出る人がいる。主な出稼ぎ先は、酒屋、縫製工場などで、ほとんどの人は毎年同じところへ行く。期間は10月中旬～4月までの農閑期、漁閑期である。

高波では漁業が頃は出稼ぎに出る人はあまりおらず、冬場でも海が穏やかな日は漁に出ていた。漁業が振るわなくなって以降、水田と葉タバコ栽培と出稼ぎなどで生計を立てていた。高波で酒造りに行っていた人は2、3軒と少ないという。

今回聞き取りを行った中で、次のような出稼ぎの例がある。

- ・酒造り 行き先は大阪、兵庫、京都、滋賀、富山、金沢などである。期間は11月～3月、4月中頃までが一般的だが、4月いっぱい行く人もいる。昔は、女性は入れなかったが、現在では女性の杜氏もいる。
- ・土木 昭和45（1970）年名神高速道路建設
- ・延縄漁船の乗組員 Hさん（80歳代、男性、高波）は、昭和18（1943）年4～9月に千島列島沿いのタラの延縄漁船の乗組員をした。11人くらいの乗組員のいる船で、取ったタラは千島で加工され、出荷される。
- ・繊維・紡績会社、縫製工場 行くのは主に女性だった。現在は行われていない。
- ・石鹼会社
- ・田植えの手伝い
- ・稲刈りの手伝い 加賀方面の松任や美川などの稲の借り入れが8月だったことから、女性が稲

の刈り入れ部隊として手伝いに行っていた。手の空いた女性はほとんど行っていたらしく、60代の人もいた。昭和40年代以降は機械化によりなくなっていった。期間は1週間から10日ほど。1枚の田を3、4人で担当し、朝5時ごろから刈りっぱなしだったという。

- ・茶摘みの手伝い 京都 7月10日～20日
- ・飲食店

以上の中から酒造出稼ぎと女性の出稼ぎを取り上げて、詳しく記述していく。

今回、杜氏として酒屋に出稼ぎをするYさん(70歳代、男性、小泊)に話を聞くことができた。Yさんは現在も出稼ぎに行っている。Yさんは27歳から出稼ぎを始めた。最初は三重県の津市だった。いろいろなところに酒造りへ行っていた人の口添えで酒造りに行くようになった。お父さんも酒造りの出稼ぎをしていたがお父さんとは別のところへ行った。その頃は酒造りへ言っている人の間で情報交換して、京都伏見などいろいろなところへ行った。55歳くらいで杜氏になった。現在は小松の酒蔵で高級酒を作りながら、富山の酒蔵も掛け持ちで杜氏として働いている。

杜氏は1つの酒蔵に一人いて、責任者や監督のような役割を果たしている。税金関係の仕事も担当する。現在でも能登に80人くらいいて、多い時は200人くらいいたそうだ。

20年前くらいから杜氏の技能試験が始まった。一級がとれたら杜氏になれる。検定の講習会もある。

能登杜氏組合というものがあって、内浦支部と珠洲支部がある。夏に3日間の講習会がある。一般の人は有料で1万円かかるが、組合員は組合費を払っているので無料になる。組合の人が全員来るわけではないが、杜氏の人はほとんど集まる。

昔は酒造出稼ぎは繊維や土建と比べると給料が安かったという。昭和26、7(1951、1952)年ごろ、はじめの給料は1日500円だった。それから数年で東京オリンピックなどにより経済が上向きになり、1日1,000円になり、それから毎年200円ほど上がっていった。現在は下っ端で1日13,000円もらえる。杜氏の給料は一般の2倍になる。住み込みで食事つき、往復の旅費もすべて相手持ちという待遇だ。

昔は小泊からも10人くらい、多い時はそれ以上作り酒屋へ出稼ぎに行っていた。団体で行っていたのではなく、つてを頼ってばらばらに行くことが多かった。酒屋で働いている人数は規模によって違うが、灘など大きいところだと20～30人働いていた。現在は機械化で人数が少なくてすむ。

昔は杜氏の下にカシラ、ダイシ(代師)、モトヤ、カマヤ、アライバがいて、それぞれの下に働き手がいた。カシラは杜氏の補佐役をしている。昔は弟子がいるなどして人が多かったが、機械化してから人手が減り、現在では杜氏、カシラ(大きな酒屋)ダイシ、カマヤ、アライバでやっ

ている。大きいところはその下にも何人かいる。小さい酒屋にはダイシはおらず、杜氏がその仕事を受け持っている。最初はアライバとして雑用から始めた。主に洗い物などを担当し、人が足りないところを手伝いながら、仕事を盗みながら覚えた。始めて5年くらいで工程をつかみ、今では10年ほどでダイシになれる。

仕込みの間2ヶ月は朝早く仕込みをして、昼寝をして、夜はこうじの操作をする。仕込んで20～30日酒をしぼり、その後ろ過、殺菌をする。日付をずらして仕込みを行い、早く仕込んだものからろ過していく。

Yさんの奥さんは、嫁いできたものの、舅も夫も出稼ぎに出ている、冬場は病弱な姑と子供の世話を一人するなど大変だったようだ。冬は子供を背負いながら道路の雪よけをすることもあった。子供が大きくなると自身も働きに出た。学校の給食員として30年間働いた。職場が小学校だったことから授業参観に行くことはできたが、Yさんは一度も子供の授業参観に行けたことがないという。

出稼ぎといえば男性のイメージがあるが、女性も出稼ぎを行っていた。

Hさん(70歳代、女性、雲津)は昭和37(1962)年から昭和52(1977)年に出稼ぎをしていた。昭和37年、Hさんは27歳で、一人目の子供が3歳だった。3年ほど出稼ぎをした後、二人目の子供ができたのでいったん中断して、昭和44(1969)年から出稼ぎを再開した。出稼ぎは10年行い、近畿・東海地方や金沢などで仕事をした。知り合いの紹介があれば、面接をしたこともあった。

Hさんは友達のTさん(70歳代、女性、雲津)と一緒に出稼ぎに行っていたこともある。2人は冬の間に岐阜の大垣市へ出稼ぎに行っていた。繊維関係の仕事で撚糸、よりかけの仕事をしていた。「出稼ぎは決まった8時間働けば、食事の支度もしなくていいし最高だった。娘にかえったような気分で楽しかった」とHさんは言っていた。その頃のお嫁さんは大変だったらしい。晴れている日は、朝は4時くらいに起きて田んぼや畑、瓦の仕事をしたそうだ。雨でも姑に聞いて、休んでいいといわれれば休みがもらえたが、違う作業を頼まれたら休めなかった。片付け物をする時間がなかったので、子供を抱えて洗濯をしに実家へ帰り、子供を見てもらいながら洗濯をしていた。そんな生活だったので、出稼ぎ期間は、家にいる時はなかなかとれない自由時間があつたので楽しんでいたようだった。しかし、出稼ぎができたのは舅や姑が元気だったからだといふHさんは付け加えてもいた。

2、3年目は仕事が終わっているので歓迎されたらしい。日曜など暇な時は皆でわいわい編み物などをしていた。たくさん友達ができて、今年名古屋で一緒に働いていた人が30年ぶりに尋ねてきてくれたらしい。

しかし子供が小さい頃だったので寂しい気持ちもあったそうだ。働いていても、夕方になると子どもを思い出して、淋しい、恋しい気持ちになったという。また、Hさんの夫も兵庫県の酒屋

へ行っていて、夫婦共に出稼ぎをしていた。子供は小さい頃祖母と暮らしていた。電話をすると「いいこにしている」と答えが返ってきたが、後で「お母さんのところへ行きたい」と大泣きしていたと聞いてつらかったという。

この例は結婚後も出稼ぎを行い、比較的長い間出稼ぎを続けた例だが、結婚前に数年だけ出稼ぎをしていたという例は多い。

女性の例では、Mさん(80歳代、女性、伏見)は結婚前、中学卒業後に金沢の軍需工場に集団就職して1年間働いた。Sさん(70歳代、女性、雲津)は金沢の紡績会社に2年出稼ぎをして、その後珪藻土の工場に半年間勤めていた。勤め先は世話をする人がいて紹介してくれた。ここでも「金沢にいる時とても楽しかった」という話を聞いた。19歳で仕事をやめて珠洲に帰ってきて結婚し、その後は農業の手伝いなどをした。

男性の例では、Kさん(30歳代、男性、雲津)は高校卒業後、名古屋で2年ほど働いた。その後また2年ほど出稼ぎでいろいろなところへ行った。現在は実家の農場を手伝っている。またGさん(30歳代、男性、小泊)は、高校卒業後滋賀の運送会社に勤めていた。その後珠洲に戻り、農業に従事している。家はもともと農業をしていて、お父さんの代に大型機械を入れて大規模化した。結婚前の7年間は富山の酒蔵へ出稼ぎに行っていた。

#### 4. 考察

以上、小泊校下の出稼ぎの実態について述べてきたが、やはり出稼ぎとは人それぞれの生活スタイルに合わせて様々なものであり、出稼ぎを行う理由も出稼ぎに対する思いも様々であった。この地域で出稼ぎが発達したのは、3節でみてきたようにやはり能登半島の先端に位置し、交通手段の未発達、地元での商工業を誘引する要素に乏しいというマイナスの要素がある。しかし、出稼ぎをしていた、あるいは出稼ぎをしている人々の思いはそうのように後ろ向きなものではなかった。

特に女性の出稼ぎについての話は、出稼ぎのイメージを覆すものであり、2節で述べた第4の背景にあてはまるものが多く、家計補助の目的を持っていたというよりは出稼ぎで楽しんでいたというものが多かった。もちろん仕事自体は大変なものだっただろうし、家族と離れる寂しさや大変さなどの話もあったが、そのような話よりも「このようなことが楽しかった」というように生き生きと語ってくれたという印象がある。

しかし、いろいろな方面で機械化により人手がいらなくなり、出稼ぎは減少してきた。また出稼ぎをするよりも、他地方に就職し、集落には戻らない若い世代が増えてきた。「若い世代の多くは高校卒業後、大学や仕事に出て集落にとどまらない」というような話を何度か聞いた。高学歴

化が進む中で、この地域で大卒の仕事としては市役所勤め、教員、郵便局勤めなどしか仕事がないからだという。若い30歳代の男性が以前出稼ぎをしていた例も述べたが、いずれも実家で仕事があり、それ以外の若い世代にとっては現代出稼ぎをする動機もメリットもない。出稼ぎはもともと農業と深いつながりがあったが、農業に従事している人も減少している。このまま出稼ぎはなくなっていくのだろうか。

そんな中で酒造出稼ぎについては、「伝統的な杜氏・蔵人」という働き方があり、農閑期や漁閑期の収入を得る手段としてというよりは、その仕事に誇りを持っている、好きだから続けているという印象を受けた。Yさんは70歳を超えても杜氏として活躍している。しかも酒蔵をかけもちするなど、とても精力的に仕事に取り組んでいる。それはやはり仕事に対する情熱によるものだと思う。Yさんは最近の若い世代が清酒を飲まなくなっていることを嘆いてもいたが、最近若い女性で酒造りに興味を持ち、研修をしている人がいることを教えてくれた時は嬉しそうにしていた。「能登杜氏」は全国に名の知れた伝統的な職人で、これが途絶えることはとても惜しいものだ。Yさんが最近は見学が多いことや、若い人で興味を持っている人がいると教えてくれたが、そのように杜氏という仕事のやりがいや働いている人たちの思いを若い世代が知る機会が増えれば、能登に暮らし出稼ぎをしながら働くという生活のスタイルに未来があるかもしれない。

## 5. おわりに

今回の調査実習地は私が生まれ育った珠洲市ということで、楽しみにしていましたが、お話を聞く中で珠洲をどうにかしたいが若者は出て行ってしまうという声が多くあり、つらくもありました。それでも、皆さん生き生きと昔や現在の生活をお話してくださって、珠洲はなにもないところではないということを今では自信を持って言えると思います。

最後に、本当の子供や孫のように温かく迎えてくれ、お話をしてくれた方々に感謝いたします。